

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（小学五年生の「僕」）「文弘」・「ブンちゃん」・「フミ」・「フミちゃん」は、いつも自分に厳しい父に反発している。ある日、「僕」は親友の雄二の家に行つて、たまたま雄二の母親と話をする事になった。）

「親なんて、みんな自分の子どものことが心配でさ。ブンちゃんだって同じでしょ」

「うちの親は違うけど……」

僕は小さく頭を振つて溜め息をついた。

「そんなことないよ。ブンちゃんのこと気にかけてるって。子どものことを心配しない親なんていやしないよ。当たり前じゃないか。でも、いいよね、ブンちゃんは勉強ができるから。自慢の息子だ。鼻が高いだろうね。あ、こんなこと言うから、雄二が僻むんだね、ははは。でも、あれでいいともあってさ。勉強がだめだからって別のことで目立って、あたしを喜ばせようとしたりするし。ま、運動会の駆けっこくらいなものだけださ」

普段おちゃらけた雄ちゃんが運動会の徒競走だけは真剣に走るの、そういう訳もあるんだ。

おぼさんは雄ちゃんのことを可愛くて仕方ないのだろう。羨ましさと少しの嫉妬を感じた。

（中略）

雄ちゃんからの帰り道。ふと遠回りして、両親が働いている工場に立ち寄ろうかな、と思った。雄ちゃんのかあちゃんの話が聞かされて、親がなんとなく恋しくなったからだ。胸の奥がむず痒いような、なんか妙な気分だ。

猛スピードで国道を西に向かった。掘つ建て小屋の工場が見えてきた。

僕は自転車をトタンの壁に立て掛けた。

「お盆明けまで？ そりゃあ、無理だ」

正面に回ろうとしたとき、工場の中から父の大声が聞こえ、僕は怯んで足が止まった。

「え、はい。そうですか。じゃあ、なんとかしますよ。はい、はい。そういうことで」

チン。受話器を置く音が聞こえた。

僕は壁を背にして、そのままそこに腰を下ろして身を潜めた。

「何だって？」母の声だ。

「お盆明けまでに、全部納入しろだよ。ふざけんってんだ。お盆明けてことは、こっちは休みなしで働けてことだろ。まったくよ、ヤツらはお盆は休むんだろうがっ」

父は相当怒っている。

「たまには断つてもいいんじゃないの？」

「ばか。そんなことできっこねえ。じゃあ、他に回すって言われちまう。現にあのヤロー、いつも、そういう匂わし方をする。脅しやがって。それも偉そうに。クソ面白くねえ。前の担当者はいい人だったがな。あの若いのに代わってから、いつもギリギリになって言ってくる。去年のお盆もそうだった」父の声は段々大きくなる。どうやら今夜は近寄らない方がよさそうだ。もうこのままここを離れよう。

「じゃあ、今年のお盆もどこにも行けないね」

「ああ」

「うちの子も、どっか遊びに連れてってやりたいけど」

「だから、そんな暇がどこにあるっ」

「だったら、もう期待させるようなことは言わない方がいいよ。去年だって、万博に連れてってやるって、あんなに喜ばせておいて。フミが可哀想だよ。とうちゃんは、飲んじゃうと気が大きくなるんだから、気をつけなよ。ホント、悪い癖だよ」

「それとこれとは話が違ふだろ。オレだって、ヤツらを遊びに連れてってやりてえさ。だけど、仕事がなくなっちゃったら、うちはやってけねえぞ」

「そうだね」

「百姓やってたって、喰うだけしか稼げねえから始めた仕事だ。それにうちだって建て替えてえしな。近所だって、みんなうちを新しくしてる。オレだって、うち建てるのが夢なんだからな。それには今、厭な思いをさせられようが、休みがとれなからうが、

我慢して働くしかねえだろ。稼いでうち建てたら、ヤツらにだって部屋も持たしてやれるし、新しい机だって椅子だって、おお、ふかふかのベッドだって、全部揃えてやる。誰にも文句は言わせねえ」

「ホントだね。だけど、いつになったら楽になるのかね。あの子たちには、こういう思いをさせたくないけど。この先、どうなることやら……」

母が最後に大きな溜め息をつくのが分かった。

「オレだって、あいつらの将来のことを考えてねえ訳じゃねえさ。美幸はまだ分かんねえけど、文弘のヤローは、じいさんに似たんだろう、頭のできがいい。だったら、いい大学だって行かしてやりてえしなあ」

「あれ、工場、継がせる気じゃなかったのかい？」

「こんなもんやったってしょうがあるめえ。あいつがホントにできがいいんなら、下請けみてえにペコペコ頭下げる側じゃなくて、下げさせる方になんきや意味がねえんだ。それには大学くらい出してやんねえと。あいつには厭な思いはさせたくないねえ。なのに、まったく。」

A だ。あのヤロー、齒向かってくるばかりだ」

オレって期待されてるんだ……。あのとうちゃんが、オレに……。

「とうちゃんも、ちゃんとそういう気持ちと話せばいいんだよ。もう、ごまかしとか利かない年なんだから。いつまでも、文弘だって子どもじゃないよ」

「そりゃあ、そうだろうが」

「とうちゃんが、ぶっきらぼうに接するからじゃないのかい？ 不器用なんだから」

「そんなことはねえさ」

②「まったく、親子して反抗期かい。こりゃあ、どうしようもないね、ははは」

両親の話を盗み聞きしているうちに、むず痒かった胸の奥が、次第に苦しくなってきた。

③「子どものことを心配しない親なんていじゃないよ」雄ちゃんのかあちゃんに言われた言葉が聞こえた気がした。

③「なんだか急にすまない気がした。自分でもよく分からないまま、いてもたってもいられずに、僕は立ち上がると、熱気の籠もっ

た工場の中に入った。

「あれ、フミ。何しに……」

段ボールの裁断屑を集める作業をしていた母が僕に気づいて声を掛けた。

僕は母に答えることなく、段ボールの屑を工場の表にある屑山に運び始めた。今の僕にはそれくらいのことしかできないんだ。

「何やってるっ」父が怒鳴った。

「手伝う」

僕はひと言だけ答えると、また屑を抱えて表に運んだ。

「何が手伝うだ、邪魔だから帰れっ」と父が大声を上げる。

それでも構わず、また僕は屑を両手いっぱい抱えると、屑山に運ぼうとした。

「余計なことをするなっ」

苛立った父は僕に近づくと、僕の首根っこをつかんで工場の外へ連れ出し、突き飛ばした。僕は真後ろに尻餅をついた。転んだ勢いで屑が宙に舞う。僕は膝をついて地面に這いつくばると、散らばった屑をかき集めた。

「さっさと帰って勉強でもしろっ」

「たまには手伝って言ったじゃねえかっ」

拾った屑を屑山に捨てると、僕はまた工場の中に戻ろうとした。

「親の言うことが聞けねえのかっ」

父は僕を捕まえると、もう一度、そしてさっきより強く突き飛ばした。今度はヘッドスライディングをするように、僕は地面に横倒しに転んだ。

「とうちゃん、人通りがあるんだから、やめなよ」

母が駆け寄って、僕のズボンの汚れを叩いた。

「フミも、一体どうしちゃったんだい？ 何があったんだい？」

僕はそう問い掛ける母の手を振りほどいて、工場の中へ向かった。

「しつこいやローだなっ」と、父にまた突き飛ばされても、今度はよろけただけで転ばなかった。

工場の中へ戻ろうとする僕の前に父は立ちはだかつて、両手で僕の肩をつかむと、前に進もうとする僕を押し戻した。

僕は堪えきれなくなった涙をこぼしながら「手伝うんだっ」と、足を踏ん張った。

「とうちゃん、手伝うって言うんだから、好きにさせればいいじゃないの。そういうところがBって言うんだよっ」

母がふたりの間に割って入り、揉み合いになる。母が父の手を僕から放そうとしたとき、バランスを失った父が尻餅をついた。「まったく、親子でばかんだから」母が呆れたように言う。

「手伝うんだ……。手伝うんだ……」

僕は呪文のように、その言葉を繰り返した。

父はゆっくり起き上がって「バカヤロー。勝手にしろっ」と言うと、それ以上は何も言わず、裁断機の前に戻ると僕に背を向けた。

母は僕の前にしゃがむと、服のあちらこちらに付いた埃を叩きながら「お前だって、なんでそんなに手伝いたいのか、訳を言わなきゃ分らないだろ」と言った。

僕は全身を震わせながら嗚咽した。それでも母の問いに答えずに、工場の中に入った。

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔を手の甲で拭いながら、僕は裁断屑を何度も何度も屑山へ運んだ。

(中 略)

〔翌朝〕寝癖のついた頭を掻きながら、茶の間に行くと、父がお茶を啜っていた。台所から味噌汁のいい匂いが漂ってきている。

僕は大きくびをすると、あぐらをかいて、父の正面に座った。

あの後も、父は何も言わなかった。

昨日の夕方、仕事を終えて工場を出るとき、僕が勝手に軽トラの荷台に自転車を積み込んで、そして僕も荷台に乗って一緒に帰ろうとしても、父は何も言わずに軽トラを発進させた。

夕飯のとき、父は手酌でコップ酒を飲んだ。それはいつもと変わらない父の様子だったが、ひとつだけ、いつもと違うことをした。酒のつまみ代わりにしていたメンチカツをひと切れ箸でつまむと、僕の皿の上に置いた。いや、置いたというには少しばかり荒っぽく、投げ分けたという感じだった。

父の口から「喰え」という言葉は出なかったけど、顎を少しだけしゃくってみせた。僕には、そのメンチカツのひと切れが、手伝いのお駄賃のようで少しだけうれしかった。僕はメンチカツを箸でつまむと、黙ったまま口に運んだ。そして「お代わりっ」と茶碗を母に向けた。……二度目の大あくびをしながら、そんなゆうべの出来事を思い返した。

ちゃぶ台の上に朝飯の準備ができ、家族全員が揃った。母が納豆を掻き混ぜながら「納豆屋のおばさんも偉いねえ、女手ひとつで息子を大学まで出してやってさ」と、感心するように言った。

「フミもちゃんと勉強して大学行きな。かあちゃんたちが頑張ってるから、ね、とうちゃん」

母のそんな問い掛けにも父は黙ったままだったが、昨日、工場で父母の話を立ち聞きしてしまった僕は、すまない気分になり「オレ、たまに手伝うから……」と、ぼそっと父に向かって言った。本当は、毎日手伝うと言いたいところだったけど、不発弾探しのこともある。

父が何も言わない代わりに「そうか、とうちゃんの手伝いか、そりゃあ偉いな」と、祖父が僕を見ながら笑った。

「たまにだから。別に、偉くねえよ」

僕は照れ臭くなって「歯、磨いてくる」と、茶の間を立った。

洗面所で、歯ブラシに練り歯磨きを付けると、裏木戸から井戸端に出た。見上げた空は真っ青で、梢のどこからか、山鳩がホーホロ、ホーホロと気持ちよさそうに鳴く声が聞こえた。

② 軽トラ——軽四輪のトラック。

手酌——自分で酒をついで飲むこと。

不発弾探し——近所の地中に埋まっているという太平洋戦争時の不発弾を見つけ出して、有名になろうと、雄二たちと計画していた。

問一——線部①「胸の奥がむず痒いような、なんか妙な気分だ」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア「子どものことを心配しない親なんていやしないよ」という雄二の母親の言葉には納得がいかず、それが本当かどうか両親に直接きいて確かめたい気持ち。

イ「子どものことを心配しない親なんていやしないよ」という雄二の母親の言葉に少し納得はしたものの、自分は雄二ほどには愛されていないと残念に思う気持ち。

ウ「子どものことを心配しない親なんていやしないよ」という雄二の母親の言葉に納得し、早く両親に会って、反抗ばかりしてきたことをあやまりたい気持ち。

エ「子どものことを心配しない親なんていやしないよ」という雄二の母親の言葉に納得したわけではないが、やはりそれが本当ならうれしいと思う気持ち。

問二 空欄 A に入ることわざとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 飼う犬に手をかまれる イ とびがたかを生む ウ かえるの子はかえる エ 親の心子知らず

問三——線部②「まったく、親子して反抗期かい」とありますが、そのように言った母親の気持ちはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 父も子も互いに素直になれないのは困ったものだと思います。両方とも根は温かい心の持ち主だと信じている。

イ 息子はまだ子供だから反抗するのは仕方がないが、大人である父までが反抗するのは情けないと感じている。

ウ これほどまでに父と子が反発し合っているのは、これから先どうなっていくのだろうと不安に思っている。

エ 父と子が二人とも母の言うことに耳を貸そうとせず、自分勝手な行動をとったがることを苦々しく思っている。

問四——線部③「なんだか急にすまない気がした」とありますが、それはどのようなことに対してですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 父は「僕」に好かれようと父なりに努力しているのに、「僕」の方から父を遠ざけてしまっていたこと。

イ 父は「僕」のことをあれだけ期待しているが、自分は勉強をしていないので期待に添えそうにないこと。

ウ 父は「僕」のことを思ってくれているのに、「僕」は自分のことばかり考えて父を誤解していたこと。

エ 父が「僕」に対して内緒にしようとしている本心を、ものかげからこっそり盗み聞きたこと。

問五——線部④「僕は堪えきれなくなった涙をこぼしながら」とありますが、ここでの「僕」の気持ちはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いざというときにも父に誤解され、日ごろ父とコミュニケーションをとろうとしなかったことを悔いる気持ち。

イ 父に自分の気持ちを分かってもらえないのはつらいが、それでも何とか父を助けて父の愛情に報いたいと思う気持ち。

ウ 父のために手伝おうとしている「僕」の気持ちを理解しようともせず、「勉強しろ」とばかり言う父に反抗する気持ち。

エ「僕」のことを理解しようとしないうちに父に失望し、自分は何をしても父には受け入れてもらえないのだとなげく気持ち。

問六 空欄 B に入れるのに適切な、人の性格を表す言葉を、本文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

問七——線部⑤「父は何も言わずに軽トラを発進させた」とありますが、その時の父の気持ちはどのようなものですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 息子が自分に反抗して強情にふるまったことに対して、腹立たしく思っている。

イ 息子に根負けして、自分の言うことをきかせられず、情けなく思っている。

ウ 息子が手伝っても、自分は何もしてやれないことに、申しわけなく思っている。

エ 息子が本気で手伝おうとしていたことが分かって、内心うれしく思っている。

問八——線部⑥「見上げた空は真っ青で、梢のどこからか、山鳩がホーホロ、ホーホロと気持ちよさそうに鳴く声が聞こえた」とありますが、ここには、だれのどのような気持ちが反映されていると考えられますか。五十字以内で説明しなさい。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（ただし、設問の都合上一部本文を変えた所があります。）

ぼく自身は、自分に関わりのない世界がこんなにもたくさんあると思いたくないために、いつも必要以上、能力以上の本を買ってしまう。文学を研究しているのに、現代思想や社会科学の分野の本をたくさん買う。ぼくならこれも読める、あれも読めると思ってしまうのである。いや、「思いたい」と言ったほうが正確かもしれない。ぼくの場合、本というXに映った自分はいつも等身大の自分よりも肥大しているようだ。①それは、自分自身に対する見栄のようなものかもしれない。

年間の本代が二百万円とか三百万円とか書いたりするもの（もちろん事実だが、人文系の研究者にとってはわざわざ書くほどの額でもない）、自分を鼓舞する気持ちがあるのかもしれない。以前はこれだけの本を全部読むのかと、妻に聞かれたものだ。いまでも、学生はそういう質問をする。そういうときには「本を買うのは趣味で、読むのが仕事だが、いまは趣味が高じている段階である」と答えることにしている。見栄を張るのにもいろいろ（A）がいるのである。

②それでも、この見栄がなくなったらぼくは教師としても、研究者としても終わりだと思っている。直視するには、等身大の自分はいあまりに貧弱すぎる。だから、本を買う。専門外の本を買って、自分はこれだけ世界が広いと、自分自身に見栄を張るのである。これは大学生の時から変わらない。ぼくが大学生の時には、図書館の本には裏表紙に貸し出し用のカードが付いていて、本を借りるときにはそれに名前を書き込む仕組みになっていた。そこで、ぼくはわかりもしないギリシャ哲学あたりから手当たり次第に借りまくって、ろくに読みもしないで返却していた。友人が引っかけ、「お前、あんな本まで読んでるのかよ」と驚いていた。知的な見栄を張るのは、青年のトッケンでもあり、義務でもある。

この年になればまさかそんなことはしないが、その代わりに自分自身に見栄を張るようになったわけだ。それは、ぼく自身の精神的な若さへの憧れでもある。若いということは、いまの自分に満足していないこととでなければならない。いまの自分に満足している若者は現実にはへたり込んだ精神的な「老人」である。精神的な「若者」は、いつもいまの自分に不満を抱えている。だから、理想の自分へ「成長」しようともがくのである。それは少しもみつともない姿ではない。「大人」はそういう「若者」を温かく見守るものだ。

映画でも、アニメでも、ドラマでも、音楽でも、絵画でも、それらを前にしてぼくたちの心はこれだけ複雑な働きはしないので

はないだろうか。誤解のないように言っておくと、これは本がこれらのメディアよりもすぐれているという意味で言っているのではない。本はこれらとは何かが違うと言いたいだけなのである。

本には何かはよくわからないが、そして実際に読んでもわからないかもしれないのに、自分が知らなければならないこと、わかっておかなければならないことが書いてあると、あなたは思っているはずだ。本は自分を映す **X** だと考えれば、それはこうありたいと願っている未来形の自分ということになる。つまり、いまよりは成長した自分である。

そういうあなたが読む限り、本はいつも新しい。現実には、未来に書かれた本はない。本はいつも過去に書かれている。当たり前前の話である。しかし、本の中に未来形の自分を探したいと願う人がいる限り、本はいつも未来からやってくる。そのとき、本には未知の内容が書かれてあって、そこにはそうありたい自分が映し出されている。これは、理想の自己発見のための読書、未来形の読書と呼べそうだ。古典を新しいと感じることがあるのは、そのためなのだ。本はそれを読む人の **X** なのだから、その人が読みたいように姿を変えるのである。

だからこそ、「本を読みなさい」という言葉はいかにも学校空間的な（**B**）に聞こえてしまうことにもなる。学校空間は成長物語が好きだから、読書にもそれを求めてしまうのだ。そろそろテレビを切り上げて勉強しようかなと思ったまさにそのときに「勉強しなさい」と言われてしまう **ケイケン** をしたことがあるのではないだろうか。ものすごくイライラして、勉強する気がなくなってしまうものだ。あれに似ている。

そこで、読書の時間だけを決めてどんな本でも読んでいいことにすると、あなたは喜んで本を読むかもしれない。しかし、読む本を決めて読書を強制されると、あなたはイライラするだろう。それは、読む本を決めて読書を強制することは、こういう自分になりなさいと未来形のあなたを学校空間が決めることだからだ。だれでも未来の自分は自分自身で決めたいと思っている。そこまで学校空間に縛られたくはないと思っている。だから、イライラするのだ。

それでも、推薦してくれた本を読んでよかったと思うことがある。それは、推薦してくれた先生と信頼関係ができている場合ではないだろうか。つまり、あなたはその先生にあなただけの **Y** の一部を預けてもいいと考えたのである。信頼するということは、相手に **Y** を預けることだ。では、過去形の信頼はあるだろうか。信頼する人に自分の秘められた「過去」を話すことがある。

しかし、それは過去に戻りたいからではなくて、よりよい未来を生きたいからにちがいない。信頼は常に未来形をしている。

本を読むことについて考えていくと、信頼するということがどういうことなのかということまで見えてくる。さてそうすると、自分自身に見栄を張っているばくはいったい誰を信頼しているのだろうか。

知らないことが書いてありそうな本を、そしてまだばらばらと拾い読みした程度の本を「読めばわかる」と判断できるのはどうしてだろうか。具体的には、本のタイトル、著者名、帯のセンデン文句、新聞の書評、友達からの口コミ、本屋さんのポップ（今年一番泣ける本！）みたいに平積みにしてある本のところに立ててある広告、本屋さんでのその本の扱い（いかにも「いま売れてるぞ！」という風に目立つところにドカッと平積みしてあるのか、いかにも売れ残り風に片隅の本棚に差してあるのか）、小説や評論やエッセイといった本のジャンルなどなど、こうした本をめぐる情報を判断材料にしている可能性がある。本をめぐるさまざまな情報のことを専門用語では、パラテキストという。パラテキストは本を読むときの参考や手助けにもなるし、（**C**）にもなる。

ぼくたちが本を手にとるときには、すでにそういうパラテキストに触れてしまっている場合が多い。しかし、本屋さんでまったくはじめて出会う場合もある。そのときには、ばらばらめくったページを拾い読みして、適度に知っていることやわかっていることが書いてあれば、買おうと思うだろう。このことを逆から言えば、適度に知らないことやわからないことが書いてあれば買おうとなるはずだが、「知らない」、「わからない」という否定的な感じを持ったときにはたぶん買わない人が多いにちがいない。どうしてだろうか。

それは、ぼくたちが本によって自分を肯定してほしいと思っているからではないだろうか。言い方を変えれば、ぼくたちは本によって自己確認をしたいと思っているし、もっと言えば、本によって自分の知っていることや考えていることを権威付けしてもらいたいと、どこかで思っているからではないだろうか。ベストセラーになるような本には「どうしてこんな当たり前のことしか書かれていない本が百万部も売れるのだろう」と疑問に思わせられるものがある。それは、こういう心理によるものにちがいない。「読めば分かる」と思うからその本を買おうという心理は、いくぶんかはこういう要素を含んでいるのだろう。これは、自己確認のための読書、過去形の読書と呼べそうだ。

【四】 次の①～⑤の慣用句の意味として最も適切なものを、後のア～キの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使ってはいけません。)

- ① 目を凝らす ② 目をくまます ③ 目を見張る ④ 目をつける ⑤ 目をうばわれる

- | | | | | | |
|---|-------------------|---|-------------------|---|-----------|
| ア | あまりにひどくて直視できないこと。 | イ | 特別な関心をもって見ること。 | ウ | 視線をそらすこと。 |
| エ | おどろいて夢中になること。 | オ | おどろくほどに感心させられること。 | | |
| カ | 他人のしている目をごまかすこと。 | キ | よく見ようとじっと見つめること。 | | |